高岡短期大学紀要　第11巻　平成10年３月
Bull. Takaoka National College, Vol.11, March 1998

山田村における電脳化への支援
—ふれあい祭りとパソコンお助け隊の記録—

小松　裕子　・　小郷　直言*

（平成９年10月31日受理）

要　旨

情報モデル地区の指定を受け，希望する全家庭にパソコンを配付した富山県山田村は，インターネットをはじめとする情報技術の活用に独自のやり方で取り組んでいる。本稿では，1997年夏に実施された「電脳村ふれあい祭り」の企画の一つである「パソコンお助け隊」の記録を通して，村民と学生の交流を支援という視点から追いかけてみた。さらに，外部講師による「パソコン講習会」にみられる村民相互の支援の実際も併せて報告する。そこには，外部の様々な支援を自らの日常生活にうまく取り入れながら，楽しみを忘れずに電脳化を進める村の姿がある。

キーワード
山田村　支援　情報化　情報技術　インターネット

1　山田村の電脳化*1

国から情報モデル地区として指定を受け，希望する各家庭にパソコンが配布された富山県婦負郡山田村は，村民わずか2,000人あまりの，およそ４人に１人が65歳以上という高齢化の進んだ過疎の村である。山田村の電脳化の経過を辿ってみると，実に幸運なことに，様々な支援の形が半ば自然発生的に生まれてきたことがうかがえる。幸運といってしまっては村民の努力がなかったように聞こえるが，決してそういうことではなく，努力と多くの人の関心とがうまくかみ合い電脳化を押し進めてきたということである。実際，現在でも電脳化への住民の熱意はいまだにさめやらない。いや，ますます意気軒昂なところさえ感じられる。いったいこのような熱気はどうして醸成されてきたのであろうか。

すでに報告した現地調査のなかで明らかになってきた要因がいくつかあった。[1,2] いまそれを箇条書きすると，

- 一部のリーダーシップを持った人がすでに山田村に在住していたこと
- すでにあった住民組織が電脳化の努力に振り向けられたこと
- ボランティア精神の学生たちが山田村にやってきたこと
- 村民に全国から注目されているという気概が生まれたこと
- 村役場が住民本位のきめ細やかな対応と理解を示したこと
- いまだつかみきれていないが山田村がもつ特性がうまく作用したこと

などである。

産業情報学科　*大阪大学経済学部

本稿では，上記の現地調査以降に行われた山田村での二つの大きなイベントを通して，次第にその輪郭を現しつつあるとわれわれが考えた「山田村における電脳化への支援の特徴」について報告する。今回の報告は，ほぼ半年（期間は1997年７月から10月まで）の間に起こった山田村での支援の数々のあり様を丹念に辿ることによって，今現在山田村で起こっていることに関して記録を残すというスタイルで行うことにする。われわれは「山田村の電脳化における支援の役割」というテーマで総合的な研究報告をまとめるという意図を持っており，本稿はその準備資料の一環として報告するものである。

以下でなされる詳細な報告では，次の２点にとくに注目することにした。

１）ふれあい祭りを契機とした，学生によるパソコンお助け隊の結成とそれに対する山田村の対応。これについては第２章で詳述する。

２）文化祭に向けての外部講師によるパソコン講習会に見られる村民がみせた取り組みの様子。第３章をこの報告に当てる。

最後に全般的なわれわれの簡単な感想を述べることにする。

2　学生による支援（ふれあい祭りを通して）

人口2,000人あまりの小さな山田村へ，1997年夏全国から学生が集まった。「電脳村ふれあい祭」に参加する学生達である。きっかけは，２月末にさかのぼる。インターネットの就職関係メーリングリスト仲間ではあるが全く面識のない５人の学生が，話題の山田村を訪問して高度情報化社会を考え，『就職にも役立てられたら…』と気軽にアンケート持参でやってきたのである。ところが，そこで出会ったものは想像と現実とのギャップであった。電脳化についての勝手な思い込みによってイメージしていた村をちょっと調査してみようという気軽さと表面的なつき合いでは村に入り込めず，むしろその危険性を思い知らされたという。そしてもっと真摯な態度で交流をしたいと考えるようになった。そして，少しでも村の電脳化の役に立ちたいとの呼びかけに集まった全国の学生がボランティアとして村民の活動に協力し，生活に密着した情報化の未来について語りあうイベント「電脳村ふれあい祭り'97」（以下「ふれあい祭り」と称す）を開催することになったのである。

以下，「ふれあい祭り」を軸とした，学生集団と村の受け入れ組織の結成経過，そして支援の具体的内容（パソコンお助け隊の活動に代表される）とその実態，さらには学生と村民の交流について詳細に報告することにする。

2.1　活動の母体

(1)　学生集団の結成

1997年２月末に訪れた学生たちが呼びかけ人となり，口コミとメーリングリスト，および「ふれあい祭り」のホームページを活用した仲間づくりが広がった。主な連絡手段は電子メールと直接合って話し合う「オフラインミーティング」（オフ会と略す）をうまく取り入れて行われた。オフ会は関東，関西，富山の３カ所で数回ずつ実施され，その討議内容は，即刻ホームページで紹介され，オフ会に参加できない学生も企画の主旨や準備状況などがわかるように配慮がなされた。このようにして，ふれあい祭りへ向けての学生の実行組織がインターネットを通して規模を拡大しながら形作られていったのである。

(2)　村組織の結成

学生が「ふれあい祭り」の企画を山田村に持ち込んだとき，それに対する村民の対応は早かった。ボランティアとして村民の電脳化推進に協力したいという学生の気持ちを率直に受けとめ，学生の後押しと手助けをしようと立ち上がったのは，「えんなかクラブ」という村のグループであった。

「ふれあい祭り」は村民との親密なコミュニケーションがなければ学生だけでは成り立たない。それを察したさまざまなグループや仲間がそれならもっと祭りのために「こうりゃく」*2しようと「こうりゃく隊」が結成された。学生と頻繁に相談しながら「こうりゃく隊」は学生と村民が一体となって楽しめる山田村ならではのイベントを次々に企画し，実行することになった。「こうりゃく隊」は，33名であるが，実際にはパソコンリーダ*3や家族・友人を含めると多くの村民が祭りのために「こうりゃく」したことになる。

2.2 こうりゃく隊結成の基盤

上記の「えんなかクラブ」は，次に述べる「山田村ふるさと塾」第２期生グループで，祭りの提案に対してそれを村民として全面的にサポートしようと受けて立ったのである。学生の企画を祭にまでもっていく原動力となったこうりゃく隊という組織が結成される下地が村にはあったのである。それは次の「山田村総合計画」[3)]の策定に端を発する。

●ふるさと塾

山田村総合計画（1993～2002年）は，山田村の豊かな資源と空間を活かした新しい村作りを模索し実現させるために1993年に作成された。その施策の一つ「人づくり」の一環として「ふるさと塾」があり，山田村地域づくりの学習と取り組みを進める狙いでさまざまな研修や行事を体験させるものである。現在は３期生を迎えているが，特に今回の祭りの推進母体となった２期生は，20歳代から50歳代までの男性10名，女性４名の計14名の活動的なメンバーであった。*4

●こうりゃく隊の結成へ

ふれあい祭りの話を直接役場が受ければ，祭りがどうしても役場主導となりがちである。そこで，えんなかクラブの中心メンバーに対して「学生たちがこんなことを企画しているらしい。村としては少し面倒をみてやれないものか」という相談が持ちかけられた。

当初は，学生たちが祭りの提案をし，自主的に支援活動をするということに，村としても多少助けようという心づもりだったのが，えんなかクラブを中心に祭りの規模が大きくなり，それなら，村の中で祭りを応援する者たち自身も楽しもうではないかということになっていった。こうした事の流れになったのにはえんなかクラブの母体であったふるさと塾という基盤ができていたことが大きく幸いした。この企画は，そのほかのグループへ広がり，「牛岳物産」や「同窓生」，仲のよい主婦が集まってできた「パソコングループ」などを巻き込み，「こうりゃく隊」という名前が付けられた。その後「こうりゃく隊」を「こうりゃくするグループ」も発生し総勢40～50名にもなった。

こうして全国から集まる学生との交流を目指した富山県山田村ならではの企画を立て，日本でもはじめてという電脳化を推進する祭りを行い，村民たちも同時に楽しもうというユニークな事業が開始されることとなったのである。

2.3 電脳ふれあい祭り

「ふれあい祭り」は，1997年７月26日から８月３日まで実施され，多い日には100名を超える学生が山田村を訪れた。この祭りは，学生が村の電脳化を支援するという目的を持ちながら，イベントは双方が企画し助け合い，期間中の学生の生活は，受け入れる村が宿泊や車の手配等日常の細かいところで支援するという形を自然に取ることとなった。以下は，そのふれあい祭りの様子である。

ふれあい祭りの意義と主旨は，パンフレットには次のように記されている。

『…来る夏，少しでも山田村の役に立ちたいと集まった学生が，ボランティアと

して村民の活動に協力し，生活に密着した情報化の未来について語り合うイベントを開催します。情報化の先にある「ふれあい」のある交流を通じ，情報化社会の未来を考えたいとおもいます。』

ふれあい祭りプログラムは次の３つの柱を設けて進められた。1)と2)は学生が，3)は村が主に企画を担当することになった。

1）パソコンお助け隊が中心となり「山田村の情報化をお助けする」

ここでのパソコンお助け隊の企画は，この祭りの原点であるので2.4節で述べる。

2）「情報化社会の理解を深める」

これは講演会と座談会という形式で行われた。

「インターネットと法律」「福祉と医療」「情報通信・マンマシンインタフェース」の３つの勉強会や座談会が企画され，祭りの後も現在にいたるまで各々のメーリングリストの中で引き続き討議されている。

3）「村民と交流する」ためのさまざまなイベント企画

星空ウォチング，ふれあいスポーツ，山田川で魚捕り，星空地酒パーティ，ほんこさま体験，吸血昆虫（おろろ）実体験，山村百姓体験，牛岳早朝登山，体験郷土料理，ふれあい学級交流参加，パソコンオリエンテーリング白滝姫を探せなど，盛りだくさんの企画で学生たちを迎えた。

これら学生企画プログラムと村民企画プログラムとも，学生と村民の双方から担当者を出し，連絡しあいながら運営されていった。期間中，ホームページ上に祭りの様子やプログラム内容が報告されており，学生のホームページのみならず，こうりゃく隊のホームページも作成されるなどの盛り上がりをみせた。*5

2.4　パソコンお助け隊

パソコンお助け隊は，パソコン使用の援助を求めた家庭にそれぞれの家庭の要望とパソコンの熟達度の違いに合わせた相談にのることを活動目的としていた。そして，その家庭に出向き対面による支援活動を実践した。そのことが村に大いに受け入れられ，理解されていった特筆すべき点である。この活動は，「ふれあい祭」にとって基礎になる活動であり，他のイベントとは別に基本的に学生全員が参加するものとして準備が進められ，活動に携わった学生は約70名であった。

2.4.1　お助け隊運営

(1)　学生側運営

祭りの初日に実施されたお助け隊向け講習会では，村の状況が説明され，「せかさない。あせらない。学生がいなくなってもできるような配慮を」という村からの要望をもとに，基本的な活動内容（訪問先の確認，訪問カード，お助け内容，運営の仕方，山田村事情）などの確認がされた。

学生は，お助けを希望する村の約70軒の家庭を，毎日夜６時から８時の２時間の予定で，２～３人のペアを組んで各家庭を訪問した。お助けした学生はのべ200名ほどになるが，祭りの全期間を通して参加した学生は少なく，経験者と新隊員の組み合わせで訪問した。訪問する家庭と，担当学生の組あわせは，前日までに学生隊の本部がある桂寮の掲示板に張り出される。（図１）

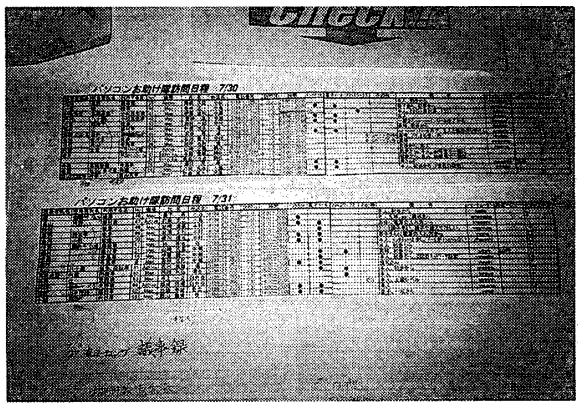

図１　パソコンお助け隊掲示板

各学生は，前日のミーティングとその計画表をもとに，事前に準備をして訪問することになっている。しかし，各家庭の都合に完全に合わせる形での隊員の手配がつかず苦労したり，途中参加の学生や期間終了前に帰る学生なども多く，隊員への講習は個々の学生同士の助け合いでなされていった。

そうした状況を修正したのが，連日のお助け訪問記録と夜のミーティングである。各学生はお助けした家庭の事情や状況，どのようなお助けをしたかを記録し，夜遅くまでミーティングをし，さまざまな問題点や工夫，よかったこと，困ったことを互いに話しあうことで，新しい隊員への講習や次の日への糧としていった。例えば，ネットワークを組む家庭にはメールを事前に送っておくと効果的であるとか，PPP接続にはお金がかかることを注意する，設定に時間をかけすぎないでソフトの使い方に時間をかけるべき（そうしないと興味が薄れてしまうから）などが，実際にお助けした学生から発せられた意見であった。他にも，『操作説明で終わってしまった。食事でコミュニケーションをとった。小学校６年生の算数の宿題をやらされた。おじいさん用にコンピュータを使いやすく設定した。趣味の車のホームページを一緒に見た。「隣の人が希望したからパソコンを希望した。隣の人が呼んだから私たちも呼んだ。」と言われた。』などの意見が寄せられた。さまざまな家庭の様子と山田村の状況を実際に肌で感じた様子がいきいきと記されていた。

お助け隊の日程がすべて終了した時点では，ほぼ予定通りに訪問でき，結果的には重複する家庭もいれて80件（村全体の1/5）をお助け隊員70人がまわったことになった。しかし，村ではマックが多く，学生はウィンドウズ使用者が多かったので支援しづらかったこと，パソコンリーダーとの連携が非常に大切であったこと，希望家庭が多く同じ家庭を何回も訪問することができなかったこと，日程がきつかったことなどが反省点としてあげられている。

(2) 村の準備

どの家庭がお助け隊の派遣を希望するかの調査は，村の各パソコンリーダの助けを借りて行われ，70件を超える家庭からお助け隊への希望が寄せられた。村では，それに先駆けて，６月にようやく全家庭にインターネットが接続出来るようにり，基本的なソフトをまとめたCD-ROMと「山田村ネットワークソフト設定マニュアル」を作りあげたところである。これから各家庭で接続が本格的に始まるのである。このCD-ROMには，Plannet PPP，ネットスケープ，ユードラ，フェッチの４つのソフトが組み込まれており，今回の希望には，この接続の手助けをと願う家庭が多く，村としてもお助け隊の支援活動を借りて接続済みの家庭を増やしたいという意図もあった。

2.4.2 パソコンお助け隊の記録（筆者同行記）

筆者の１人は，学生企画のお助け隊の一員として４日間に亘り４軒の家庭を訪問した。４軒は，村にある23の地区のうち，清水，若土，中瀬，小谷という地区である。本節では，家の中のパソコンの状況，置場所，使われ方，家族，学生との会話，学生の教え方，家の人の反応などを，支援という視点から報告する。以下で示した家の見取り図は，筆者が目にした家の一部であり，生活の中でパソコンがどのような位置に置かれているか記しておくためのもので図は正確なものとは言えない。*6

(1) 7月27日(日)18時～21時30分

お助け隊の初日に同行する学生の１人は，関西学院大学の院生で社会情報学を専攻しているという。もう１人は富大人文４年生であった。２人はPPP接続担当とMACの使い方担当とあらかじめ決めており頼もしい。訪問先は

村の西にある清水地区の家庭で，ネットワーク接続と電子メールの設定を希望している。玄関を入ると広い廊下が続きその隣りに居間があり，パソコンは居間の続きの部屋に畳の座り机の上におかれている。(図２)

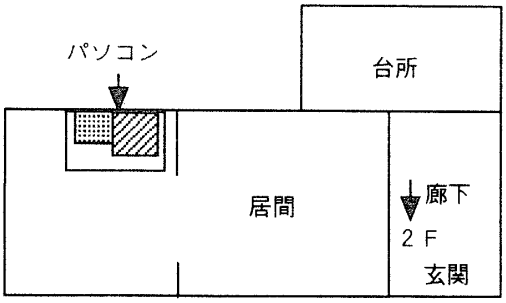

図２　パソコンの置場所(1)

お助け隊が実施した内容は，ワープロ（文字入力）と写真の張り付け，インターネット接続と電子メール設定であるが，以下学生と家族の様子を記する。

小学生と中学生の子供５人がパソコンで遊んでいる。依頼者である家長（おじいさん）は，子供たちをにこにこみているだけで，おばあさんは，コーヒーや西瓜，おせんべいなどいろいろ気をつかって用意に忙しい。

まずは，ワープロをしたいという強い要望が出て，インターネット接続は後にして，クラリスワークス*7を立ちあげる。「お兄ちゃんがひとつやってみるから，続いて一緒にしよう」「字の大きさも変えることができるんだよ。大きくしたい字はあるかな？」「名前!!!」「じゃマウスをここにもってきて，押したままずーと横にもってきて大きくしたい名前を黒くしよう。……」など。相手の様子をみながら教える態度に感心する。

文字の入力の後，ドロー機能を使ってはがきを作ってみる。その際，備え付けられているカメラ（TV会議システム）で写真を撮り，はがきに張り付ける。印刷されたものをみて家族中が大感激である。操作が分かるとか分からないとかはともかく，「自分の家のパソコンでもこんなことが出来るのだ」ということに感動している。それまで，黙っていたおじいさん「コピーやらドローやらペイント（ペイントのこと）やら，言葉おぼえんなんがいね。なんちゅう難しいもんや。」と感想を述べる。

子供が５人いると，その中でもいろいろレベルの差がある。よくできる子は，端末の前を占領し，あまり出来ない子は遠目にみている。しかし，やってみたいと思う気持ちはあるようで，「今度は君がお兄ちゃんの言う通りやってみて」とさそうと，うれしそうにパソコンの前に座る。言われた通りに，キーボードを押したり，マウスを動かしたりしながらも，なにかしらマックの操作の仕組みを覚え，新しい言葉や新しい操作も徐々にスムーズになっていく。インターネットに接続完了しネットスケープを立ちあげて山田村のホームページをみる。疲れていた大人も「ほー，ほー」といいながら食い入るように画面をみる。

夜９時をまわるが，本日の最大テーマである電子メールができるよう（村の方からの依頼）と設定を続ける。初めてみた電子メールには，学生からのメールを含め３通のメールが届いており，これにも家族中大喜びである。役場のメールに返事をする方法を教えて今日は終了する。

帰り際，子供達は外孫で普段は老夫婦２人だけだと聞いてがっくりするが，情報センターの岩杉さんから「またメールでもだしてください。返事は１週間後か１カ月後か１年後かわからないけど，気長にまってください。」と言われ山田村のペースを思い出す筆者であった。

(2) 7月28日(月)18時～21時すぎ

今日訪問する家は，牛岳スキー場へ行く途中の若土という地区にあるお宅で，ネットワーク接続もキーボード入力も初歩から教えて欲しいという老夫婦２人だけの家庭である。一

緒に行く学生は早稲田大学生と大阪工業大学生で二人とも修士の学生である。１人はマックに慣れており，もう１人はハードに強いということであった。本日はパソコンリーダと一緒のため心強い仲間である。

広い庭から家にはいる。高い天井と太い梁のある立派な家で，パソコンは広間の真ん中にあり，神棚の下に設置されている。

おばあさんの話によると，息子も孫もコンピュータ関係の会社に勤めており，孫はここに来てはコンピュータで遊んでいるという。「お子さんやお孫さんから教えてもらわないんですか」と聞くと，「忙しいし，離れているから教えてもらったことがない」と言う。

本日は，インターネット接続と電子メール設定，TV会議システムの確認を実施。まずインターネットの接続をすませ，おじいさんがマウスを握り，おばあさんが隣でうれしそうに一緒に話を聞く。おじいさんが迷っていると隣でおばあさんが教える。パソコンお助け隊も二人に合わせてとてもいい感じで進む。(図３)

図３　パソコンお助け隊
老夫婦仲良くキーボードを打つ

「おじいさんと交代で教えてもらったらどうですか？」と言うと，「なーん。わしは自分でゆっくりボタン（キーのこと）をみながらやりたい。なにしろボタンが全くわからんからそれから勉強せんならん。今日のこともだいたいわかった。あしたお昼にゆっくりやるちゃいね。」とほがらかに笑う。

おじいさんは，山田村のホームページに繋がると「ゲートボール」の項を探すがなくてがっかりする。それでも，お酒のホームページなどに，知った顔を見つけると，「こいつはどうだ，ああだこうだ」といろいろ講釈が始まる。

１人の学生が，お年寄りのマウス操作の遅さと理解力にどうしていいかわからず，お年寄りの前で「こんなだとは思わなかった」とつぶやくが，お年寄りは気にもせず一生懸命にインターネットを楽しんでいる。

電子メールでは，昨日の学生のように事前にメールを送っておいたので，繋がったメールを開くと情報センターから２通，筆者から１通届いていた。筆者のメールを見て「これ，だれけ？」「私。来る前に送っておいたんです。またすこし慣れてきたら返事くださいね。」「へー。」とインターネットほどの感情の起伏はない。情報センターからのメールに返事を書くことにする。キーボードは全く使えないので，お助け隊が替わりに文章をいれる。(今日ネットワークが繋がりました。世界の仲間入りです)おじいさんが返信ボタンを押す。やっと嬉しそうな笑顔がこぼれる。

学生の桂寮[*8]とTV会議をする。この家ではテレビなどの取材も多くTV経験は豊富であるが，自分たちで操作はできない。まず桂寮へ電話しておく。これには，おばあさん一言。「いっつもながいぜ。TV電話するがに，さきに電話しておかんなんが。おっかしいね。この前の取材のときもそうやった。」桂寮の学生と繋がる。声が小さくて聞き取れない。微妙な時間差の声と映像のタイミングは非常にむつかしい。しかし学生は大喜び。こちら「もしもし」あちら「もしもし」終わりそうにない会話を切り上げ今日の盛りだくさんのお助け隊作業は終わりになる。

最後は，利用するアイコンの名前に番号をつけ，「今度電子メールするときは，その順番

にクリックしてね。」とおじいさんに言う。おばあさんは理解した様子である。

この夫婦は二人で一緒に楽しみながらパソコンを使いたいという気持ちが強く感じられる。忙しい息子らから教えてもらうことははばかられても，こうした気安い学生達の支援にはとても素直に反応している様子に支援する側の配慮の重要性を感じる。

それから，おじいさんの棟梁として日本全国めぐりの話，夫婦でのゲートボールの輝かしい活躍の話，新しく隣りに家を建てる話，すいかを食い荒らすたぬきを５匹もつかまえた話を聞く。「それでは，また来ます。」と切りのいいところで終わりにする。帰り際，家族の人が待ちくたびれているだろうともぎたてのとうもろこしを４本戴く。また，おばあさんが湯がいてくれたじゃがいもはそのままで甘い。さっそくその湯がき方を教えてもらう。「こんどゆっくり教えてあげるわ。またおいで」と言われ，パソコンの支援で来て別の支援をしてもらう約束をする。こういうことが電子メールを使ってこれからも続けていけることを相手に告げることはもうすっかり忘れてしまっていた。

(3) 7月30日(木)19時00分～21時30分

本日の家は中瀬地区の家庭。今日一緒にいく学生は独学でホームページを作っているという群馬大の修士の学生。訪問先の家庭は，40歳代のご主人と奥さんと子供２人（中学生と小学生），老夫婦の６人家族で依頼人はご主人である。ネットワークはすでに接続している。依頼内容は，プリンターが突然動かなくなってしまい印刷出来るようにということと表計算について教えて欲しいの２点である。

この家も総漆の柱や戸，高い天井，欄間，梁がみるからに立派な作りである。家中の戸を開けて部屋をみせてくれる。家族の結婚式や葬式など全ての行事はこの家でしているという。（図４）

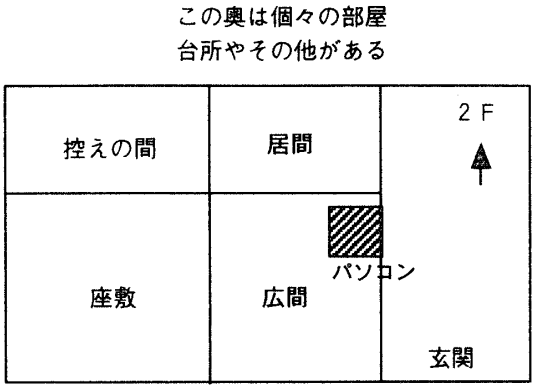

図４　パソコンの置場所(2)

さっそくプリンタの様子をみる。いろいろ試みるがうまく行かない。学生が本部に電話をする。本部には，このようなときのために専門家が配置されている。しかし，状況が複雑なので本部もわからない。よく話を聞いてみると，調子が悪くなった時期と山田村のネットワーク接続の時期が同じ頃であることがわかり，プリンターの配線をネットワーク利用に付けかえてうまくいった。ほかのお助け隊もこんな感じで家の人と相談しながらやっていると学生が言う。

ご主人から表計算の質問を受ける。仕事に使いたいと目的がはっきりしているので，「使い方の本はみましたか」と聞くと奥さんが奥にしまった箱の中から取り上げる。「ぜひ表計算の部分だけでもゆっくり読みながら試して下さい」と言うと，「いままでこういうものをしっかり読むなんてことは考えもしなかった。でも勉強しなくちゃね。」

一方，奥さんは，PTA会の議事録の紙を手に「こんなものもできますか」と言う。学生がひとつひとつ一緒にやりながら時間をかけて完成すると「うれしい。こんどは１人でやってみる」と二人とも積極的である。この家庭は，子供も夫婦もそれぞれに利用しようと前向きである。家族で取り組む様子がとても暖かい。

このほかにも，ソフトウェアのバージョンアップのこと，ワープロ文書の互換のことなど次々に質問される。これまで分からない者

同士で話していても解決しないことが多くていろいろ困っていたという。聞きたいことがたまっている様子に，手近な支援の必要性とそれ以上の支援をいかに積極的に活用するか，そういうシステムをどのように作り出すのかという課題を再認識させられた。

(4) 8月2日(土)19時～22時30分

お助け隊最終日。一緒のメンバーは同志社大の修士学生と神戸大の学生。本日の訪問先は，小谷というわずか9軒の小さな部落の家庭である。パソコンは控えの間といわれる普段あまり利用しない部屋の隅に置かれている。（図5）

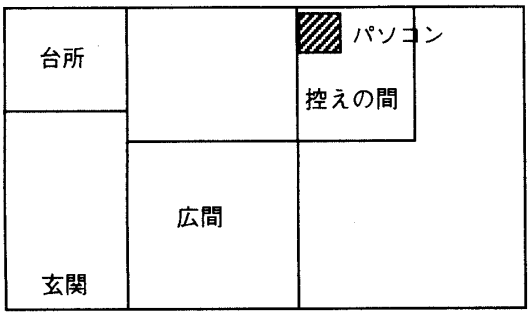

図5　パソコンの置場所(3)

本日は50歳代の奥さんに初歩からの手ほどきで，ネットワークも全く接続未了である。

「これまで全くさわったことがないのは，どうしてですか」と聞くと，「本当は，初めからみんなと一緒に講習をうけたかった。でも病院に勤めていて，夜勤と日勤の交代制で，17時間勤務という体制の日もある。この部落の人はほとんどが勤めているからこの部落で使う人は少なく，教えてもらえない。講習会ももっといろいろな時間や内容でしてほしい。今ではもう差がついていまさらという気になっている。パソコンはこわい。恐ろしい感じがする。なにかしたら中身がなくなると言われている。」と話す。

一方で，学生はもくもくとインストールを始める。IDとパスワードを入れる段階になって役場からきた連絡メールを紛失していることが判明し，学生から「探して下さい」と言われた奥さんは，パソコンを教えてもらう前にすっかりおじけづいてしまう。とにかく情報センターに連絡をとりIDとパスワードを聞き，設定してホームページをみる。

学生達はふれあい祭りやローカルな新聞社のページなど自分たちが興味あるページを紹介するため，初めてホームページをみた奥さんには全く理解できない。ふれあい祭りはあまり興味がないらしい。学生がマウスを握ったまま，奥さんは遠慮しては完全に聞き役になっている。そこで，「山田村のホームページをみたらどうか。それに，お母さんが自分で触った方がいいと思う。」とアドバイスしたところ，おそるおそる自分でマウスを握り始め，徐々に興味を持ち始める。特に山田村のホームページは強力である（他の家々でもそうであった）。これまであれほど無口だったのに独り言のようにおしゃべりが始まる。当初「恐ろしい」と言っていた奥さんが，学生がずっとそばについていてあげるための安心感からか時間を忘れて没頭している。

以上の4件の家庭は，老夫婦だけの家，6人家族の家，年寄りを抱えた成人だけの家とさまざまな家庭環境がある。うち，3件の家庭は利用するしないに拘わらず，居間や居間の隣りの部屋にコンピュータが設置されていた。もっとも，お助け隊がくるというので，あわてて綺麗にほこりを掃除したのだとも言われた。初めは警戒していた風の家庭も，時間が経つにつれ，学生の気易さ，遠慮のなさ，明るさで，徐々に学生と親密になっていく様は，支援される村民の側にパソコンで，それも自宅のパソコンでこんなことができるのだという気持ちの芽生えを感じさせる。また，学生側にも，帰り際には夕食までごちそうになってくる隊員もいるように，教えて上げるという気構えがまったくないどころか，なにかしら学生自身が学ぶことのほうが大きかっ

たのではないかと思われる。尤も，解決しない問題は本部に持ち帰って次の日に別の隊員が出向いて対処するというシステムがあることは，教えるという責任から逃れることができるという安心感がある反面，勝手な判断でことが進むという危険性も見逃せない。

2.5　ふれあい祭りその後

ふれあい祭りが終わり，いまも学生と村民との交流は電子メールで続いている。特に，こうりゃく隊と学生の間には祭りをきっかけに大きな連帯感が生まれ，メーリングリスト上で様々な会話がなされている。また，お助け隊を希望した家庭では，ネットワークに接続したことがきっかけとなり，それまで利用されていなかったコンピュータが，家の利用しやすい場所へ移動され，利用する機会が増えたという家もある。しかしながら，ふれあい祭りのあと多くの人の利用が進んだとは言いがたい。理由の一つに，今回のお助け内容が，２時間の１度限りのお助けで，多くの家庭が，ネットワーク接続をし，インターネットを見，電子メールで手紙を確認する内容で精いっぱいであったことが考えられる。もちろん山田村としてもお助け隊にしても，互いにはじめての経験であり，一度に多くの効果を求めることは性急というものである。

結局，お助け隊は，訪問した各家庭への支援を目的にしているが，実際は，それを世話したこうりゃく隊などの村民の意識向上へ大きく貢献したのではないだろうか。そして，その効果は村の情報化の方針（すこしずつ深めたい）と一致している。こうりゃく隊の中心的メンバーである小向氏は，「１年前に訪れた学生に作ってもらったポスターを見て，自分の家のパソコンでこんなことができるのだという感激は今も忘れられない。今度のふれあい祭りの学生と交流が続いているのも楽しい。今度は自分たちが近所やまわりの人に教えたい」と語ってくれた。

こうりゃく隊は，その後反省会と称して会合を頻繁に設けて楽しんでおり，メーリングリストでは，学生とこうりゃく隊や村民同士のメールの交換が行われている。また，メールだけでなく，祭りが終わってからも，学生の訪問が続いている。10月の住民体育祭にも十数名の学生が山田村を訪問し，中には，お助け隊で訪問した家に事前に連絡して友好を深め，泊めてもらうなどちゃっかりした学生もいる。村民も，そんな学生をおおらかに受け入れて歓迎している。文化祭にも学生が数人山田村に訪れるという。

また，学生間ではふれあい祭りの反省会や来年のふれあい祭りの話し合いが始まっている。祭りの様子を纏めるのにも忙しい。*9

村民の間にも，来年もやろうという声がある。しかし中には「今年限りーと思ってやったからあそこまで出来たけど，毎年だと大変。」「来年は，今年と同じ様に受け入れられるか疑問である」という本音も聞かれる。

結局，イベントを企画し，学生の為の宿泊施設を用意し，期間中の様々な面倒を見，食事の差し入れをするなど結構たいへんな行事となっており，こうりゃく隊の負担はそうとう大きかったものと思われる。一方で，「やりがいや村の活性という点でとても自信がついたし，楽しかった。もし来年も実施するとしたら今年の経験があるので，もっと方法を考えてみたい」とも言う。

3　外部講師による支援

山田村において，パソコンが導入されてから１年が経過した。村民同士で互いに教え合いながら少しずつ広めていこうという村の方針は，現在もかわらない。今夏学生によるパソコンお助け隊の個別訪問形式の支援を受け，村のネットワーク基盤が各家庭にも少しずつ整い，ようやく村民全体に対する教育のあり方に村の関心が向けられはじめている。ふれあい祭りを支援した村民のコンピュータ利用

には目を見張るものがある一方で，各人の理解度や利用形態の個人差も大きくなり始めている。また，それぞれが勝手な使い方をしているが「果たしてこれでいいのだろうか」という不安もあり，一度正式に講習をうけてみたいという声があがってきた。

情報化を進めるに当たり，リーダーとなるような村民を増やし，その助けを借りて徐々に利用者の数を増やしたいという村の思いは一貫している。村はとくにインターネットに接続した家庭間での電子メールの活用を期待している。また，村民からは年賀状などの描画ソフトの利用講習の声も多い。他方，初心者や高齢者はキーボードで挫折している人も少なくなく，キーボードの扱いから教えてほしいという要望さえまだある。さらに，村では2年に一度実施される秋の村の文化祭のテーマを「伝統文化と情報化社会を考える」と決め，文化祭（1997年11月3日に実施）が多くの村民にパソコン利用のきっかけになればという思惑もある。

こうした背景のもと，村の外部の講師による講習会が実施されることとなった。まずはパソコンリーダやこうりゃく隊，文化祭実行委員というリーダのコンピュータ利用のレベルアップをはかり，彼らが順次他の村民を支援できるようにと考えられた。全家庭に配付されている「クラリスワークス」を利用した「パソコンの入門講習」をパソコンリーダやこうりゃく隊を対象に2日間，文化祭実行委員を対象に5日間実施され，「電子メール講習」は3日にわけて実施された。入門講習は連続講習であり筆者の1人が担当し，後の電子メール講習は複数のメンバー*10による1日講習であった。

以下の報告では，1997年9月，10月に実施した，筆者が担当した入門講習に関して，村民の受け取り方，そこで発生している村民同士のやりとりや目に見えない関係，講師と村民とのやりとりを記録する。ここで注目すべき事は単なる講習会の記録ということではなく，講習という形態で村民を支援しようとしたときに起こる教授する側と村民との様々なギャップと意識の違いであり，また村民同士で助け合ったり，教え会ったりする様子に見られる山田村特有の強い結びつきなどに焦点を置いた。

3.1 「パソコンリーダ」対象の「パソコン入門」講習会

パソコンリーダ，こうりゃく隊を対象にした2日間の講習では，文化祭で作成するポスターや年賀状を作る手助けができ，基本的なコンピュータの知識が身につくことを目指した。彼らはもともとパソコン利用に積極的で，電子メールやネットスケープをよく利用している。やりたいことがはっきりしているが，各人の利用頻度，理解度，興味などには大きな差があり，誰かに教えてもらいながらも独学で学習している人がほとんどで，コンピュータのことが本当はよくわからないので講習を受けたいという。しかし，いざふたを開けてみれば多くの人は基本知識には関心がないことが判明してくる。マニュアルはほぼ全員が見たことがなく，講習会場にも設置されてはいない。

講習を受けたあかつきには，ほかの初心者への手助けをするという使命を持っているため，仲間の「勉強せんなんちゃ」という強い言葉に押されて来ている人もいる。それでもみんな同級生のように仲がよく楽しそうである。パソコンは9台で，講師1名，村民20名で行われた。

講師は学生に教えるように基本的なコンピュータの用語について画面をみながら説明しかけたが，それにはお構いなく自分の質問を講師にぶつけ始める。ネットワークから始めた彼らにとって，ネットスケープも電子メールも文字入力とクリック，ダブルクリックだけでほとんど操作できるので，コンピュータ用語

を使わないでも，コンピュータ利用に支障がないのである。一人が「わしたち，文字は打てるけれど，ワープロの便利な使い方はちっとも知らん。このプリントに書かれているワープロのいろいろな機能も知りたい。それを教えて欲しい」と言われて，ワープロのことを話し始めると，また別のところでは，勝手に描画ソフトで絵を書き始めている。もうすでに人の話は聞いていない。

こうなったのは，講師が受講者一人一人の要望に対応しようとして，結局ばらばらの状況を作り出してしまったのである。

これでは収拾がつかないので当初予定してきた文化祭サポートのために，画像と文字の組み合わせの理屈と手法をマスターすることにやり方をかえるはめになった。ペイントで作成した作品を，ドロー環境で読み込み，文字をつけて印刷するという作業を１日で実施するのは難しい。それにもかかわらず，教材を自分なりにアレンジしながら，今年の年賀状を作成する人やさまざまな質問が出始める。はじめて描画を体験する人が多かったにもかかわらず，少しでもコンピュータの経験があると新しい局面への対応も早くなるようである。ただし，村の中で最も進んだ意識をもつグループとはいえ，文化祭で担当する体験コーナをこなすために自分のことに精いっぱいで，他の人に教えようという気概はさほど感じられない。

3.2 「文化祭実行委員」対象の「パソコン入門」講習

次の講習会では山田村文化祭の実行委員を対象にパソコン入門講習が実施された。山田村文化祭に発表するための名札や作品紹介表やポスターを自分たちで作ろうという目標をもった各グループの代表者である。全くの初心者からワープロ程度という初心者が主体である。自分達にできるのだろうかという不安とやらねばならないという目的意識がはっきりしているメンバーでもある。今回の講習には，文化祭実行部隊である教育委員会，幼稚園父母，小学校PTA，公民館での趣味やサークル活動の代表，施設「福楽」職員，保健婦，幼稚園の先生などで，メンバーの年齢層は，20代～50代で，各年代に３～４人の女性と，男性が１人ずつという様子である。１人１人勝手にパソコンの前に座り１台のパソコンに２～３人の人が集まる。

５回の講習では用意したプリントにそった基本的内容を一通り実習したあと，文化祭の作品づくりに時間をかけることになった。もちろんキーボードやキーの扱いで戸惑うことも多いが，周りの少し分かっている誰かが理解して仲間に教えるという風に１台のパソコンを共有するグループがあったり，または，隣りどうしが，にわか教師となりがやがや，ざわざわと作業が進むというふうである。「先生！こんなことできっけ？。」「色反転ちゃなにね。ピンクの色反転が灰色ちゃどういうことね。」「子供が喜びそうやから，これ家にもっていっていいかね？」「家でスキャナーで取り込めば，なんでも塗り絵にできるね。」「幼稚園でやってみようか」など賑やかな雰囲気である。当初は１人１台の環境ではないことに少し不安を感じていたが，かえって１台のコンピュータを複数の人で共有して利用する環境がうまく作用していることを実感した。（図６）

基本操作の実習において，１台に集まる人々の様子は以下のようである。

(1)１つのマウスを順番にまわしている。例えば○の図を描くと次の人は，色を変えてまた○を描いてみる。また次の人は，パターンを変えて描いてみる。こちらが，「次は，××してみましょう！」という言葉の通りに順番に描いている機会均等型といえるもの。

(2)レベル差がすこしあるグループは，一番不慣れな人がマウスを持ち，周りがサポートする。サポートする人達もよく知っている訳で

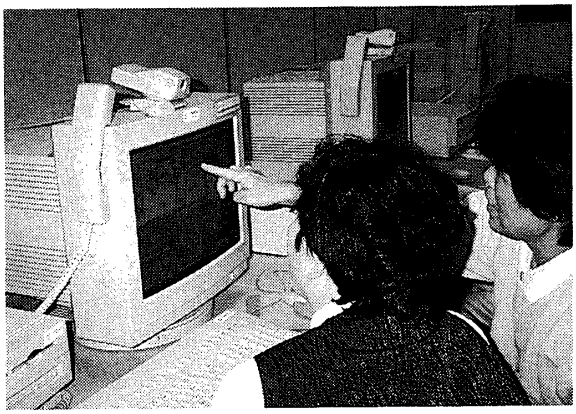

図6　パソコン講習会の様子
村民同士が教えあう

はないが，マウスを握っていない分，説明を聞く余裕がある。それを不慣れな人に（とにかく必死なので）間接的に伝えていく役割をしている。これは間接支援型といえる。

(3)少し知っている，または，マウスに少し慣れている人が１人だけのとき，その人が先にやってあげて，その後，初心者が同じことをやるグループ。支援者が席を外したときにぼっとしている人と，ここぞとばかりマウスを操作する人の２種。これは支援先導型とでも名付けられる。

(4)前回の講習では，上記の形態以外に，とにかく自分がやってみたいという勝手まい進型ともいうべき人も何人かみられたが，今回は分かっている人がコンピュータを占領することはなかった。コンピュータへの執着度の違いがそうさせるのか，あるいは，大人の余裕からか，女性同士の仲の良さがそうさせているのか興味がもたれるところである。

基本講習が済み，グループの作品（手芸や書道など）の一覧や名札などをイラスト入りで自分たちで作る段になり，ページをめくりながらイラストを相談しているグループもあれば，既にイラストを講習の復習がてら作ってきたという人，インターネットからイメージを取り込んで利用しようとキーワード検索をはじめるグループなどそれぞれにやる気とパワーを感じる。なかにはなかなか絵が描けなくて困った困ったと相談に来る人もいるので，サンプル集やアートクリップ集を紹介すると，とたんにサンプル集が大人気となり，みんなの気持ちに「出来そうかな？」という雰囲気が宿りはじめているのが確認できる。

母子保護推進協会のマークをペイントで作成しているグループが，「私たちがやっていることを，知ってもらういい機会だから，コンピュータを利用して発表することにしたんです。たくさんある仕事のことを知ってもらい，もっと利用してもらいたいと思って。」と話しかけてくる。大学などで教えていたのではなかなか味わえない充実感を感じる。

インターネットから取り込んだ画像を使ってポスターにしたグループの一員は，以前講習で，「こんなこともできるのですよ」と話のついでに言ったことを，家でやってみたら出来たので利用してみたことを話してくれる。ちょうどいい機会だからと言うことで，彼女が先生になって方法を説明すると小さな波が伝わるように，他のグループが試し，さらに他のグループに波及していく。ほんの２時間の間に自然にこうした波及がおこることに驚かされた。

操作がわからず困っているグループに，「こうしてこうするんですよ」とやってみせると，「そうやった。でも１人でしようと思うと，全然思い出せない。家に帰ったらすっかり忘れてしまう」「ここで，教えてもらいながら仕上げよう！」と言いながら作業を進める。ここに，山田村の電脳化が抱えている問題点が少し顔をのぞかせる。

幼稚園の先生二人は幼児の絵の名札を作成中。今回コンピュータに触れたことがはじめてという二人である。それでも，今日は，なんとか絵を取り込んで子供の名前をならべることに挑戦していた。しばらくして「いっぱい作ったのに，なんにもないんです。どうしてやろか？」と聞かれるが，隣りの別グループから「あんたたち，左のまどをクリックして，あの後，保存しとらんだがでない？」と

言われ，二人顔を見合わせ「そうや。それでやわ。」と笑いあっている。失敗してもがっかりしていないのが頼もしいし，講師に向かって「少し後ろでみててください」といって，自らやおら作り直し始めるのである。

中学校のPTA会報を作っているお母さんは，初めのアンケートで新聞をつくりたいという希望を書いていたが，今日，嬉しそうにできあがったものを見せる。ワープロで縦書き，段組み，ペイントの絵の縮小回転張り付け，文字回り込み，インターネットからの情報のコピーなど，どんどん新しいことに挑戦している。「先生に教えてもらったことを，全部試してみたらこんなことまでできるようになった。今日見てもらいたくて持ってきた。」と，ここはどうした，これはどうやったとこと細かく説明してくれる屈託のない様子につられてまわり中が感激する。

作品ができあがっていくにつれて，質問が具体的に目的と絡み合っていく。村民同士，互いに相手が求めるものが分かるようになり，質問する方もされる方も自信をもって質問し答えている。そうして，それぞれが発見した新しいことを教えてもらいながら自分の作品に上手に取り込んでいっている。文化祭というここに集まる人にとっての共通の目的にむかって村民同士が互いに教え合う関係が自然に形作られていく様子が特徴的である。

3.3　講習会に対する印象

通常われわれが考えるパソコン講習会では，あらかじめ準備されたパソコンとアプリケーションを利用し，講師の事前計画に従って説明と演習が進められる。講習に集まった受講者はその場限りの関係にあり，たとえ会社の仲間であっても，講習から受けた知識は受講者本人のものである。しかし，山田村の情報センターには，各家庭に配付されたパソコンやソフトウェアと同じものが用意され，受講者は自宅とほぼ同じ環境で講習をうけることができる。しかも今回の講習では，受講者はそれぞれの興味や関心を満たすことはもちろんであるが，村のリーダーとしての自覚と「文化祭」という村共通の目標が強い受講動機となっている。そうした状況での講習会は，自然に村民同士の助け合いを発生させ，「ゆっくり急がず講習をうけた村民が他の人への助けができるように」という村全体の方針に，講師もしらずしらずのうちに引きずられていくという結果になった。

来たる文化祭（1997年11月３日）には，パソコンリーダは電子メールや年賀状，名刺などを作成する情報体験コーナーを担当し，こうりゃく隊はふれあい祭りをきっかけに電子メールを始める嫁と舅の寸劇を企画している。また文化祭実行委員は，講習を終えた今も情報センターに毎晩遅くまで集まり，各種展示される作品票や発表資料の作成に余念がない。

4　山田村の電脳化と支援

いまの山田村の電脳化の特徴を記述するとすれば，それは外部からやってくる支援集団をうまく取り入れて，それをあたかも自家培養するかのように，ゆっくりと村民自身が楽しみを忘れず徐々に電脳化を拡げていく努力を辛抱強く続けていると表現できよう。

山田村の電脳化に当たり，外部からの支援が絶対に必要であったかどうかどうかは本研究をさらに続けていかなければ，まだ確証できない。しかし，外部から提供される支援をただそのまま，あるいはあるがままに受け入れるのではなく，あくまでも村民たちの日常の活動に役立つという形で取り入れるというしたたかさをもっている，という印象をこの調査の段階で強く感じている。

ふれあい祭りの企画とお助け隊による村民との接触の仕方は，学生の方に感動ややりがい，村民の生活のあり方につよく心を動かされるという展開が起こったことは間違いない。学生が支援者として主体的に村民をひっぱっ

ていくという様子は微塵もなく，村の活動に参加させてもっらているというのがむしろ実態であったといえる。

また，文化祭に向けてのパソコン講習会では，自分たちの，講習者側に対する欲求を暗に受け入れさせ，結局外部講師を山田村の事業に巻き込んでいく様子がうかがえる。しかし，これによって講師側に不快な気持ちを抱かせるというようなことは決してなく，かえって講師は村民の意図なり，コンピュータに対する意識を改めて理解し直し，むしろ講習会のありきたりの教え方に対して講師自らが反省しなければならない，という認識をもつにいたったといえる。

しかし，とにもかくにも山田村の電脳化は「めだかの学校」*11よろしく，村民，パソコンリーダー，お助け隊，外部の講師たち，情報センター，先導的リーダーたち，小学校や中学校，村にある各種グループなどが，相互に影響を与え合いながら地道な歩みを続けている。驚くべきことはこうしたグループや住民の輪，それに外部から電脳化の運動に共鳴するボランティア集団をもうまく巻き込みながら，時間を追うごとにそれが段々と成長していっていることである。

「全家庭にパソコンを配る」という形で，突然外部から村に降ってわいた大変化を，様々な支援をうまく活用することによって，村の中での日常生活のある種の活性剤のように器用に取り込んでいる様には今更ながら驚かされる。

今後の展開は，今なお未知数の点が多々ありそうであるが，一つ言えることは村に対して外部から与えられる支援と村が独自にもつ助け合うという別の形の支援のあり方が今後の山田村の電脳化に当たって一つの鍵を持っていることだけは確かなように思われる。われわれの研究も今しばらくこの線に沿って実態調査を中心に進めていくことにある。

5.おわりに

「ふれあい祭り」における「パソコンお助け隊」は，支援そのものが祭りという行事と同時に実施され，学生と村民の交流が支援の基盤となっていた。また，ふれあい祭りにおける「こうりゃく隊」や講習会に出席した「文化祭実行委員」らの間には，それぞれふれあい祭りや文化祭という共通の行事を目標とした村民相互の支援の形がみられた。

今回の報告では山田村における電脳化に向けて行われてきた各種行事について，われわれが直接見たり聞いたりしたことについて丹念に記録するという方針をとった。その際，われわれの主観をできるだけ押さえて事実を記録するという態度をできる限り取ってきたつもりである。しかし，事実の収集目的や取材の意図は押さえようもなく，調査をするものの行動に出てきてしまうことは避けられない。

こうした意味からみて，今回の報告の根本にあるのは，前回の報告を作成していた段階で，次第に輪郭を現しはじめた「山田村における電脳化への支援のあり方」の特徴といえるものについて，さらに深い調査を行ってみたいというわれわれの動機であることを記しておかねばならない。

その意味で，どうしてもわれわれの目前の興味のあるところに引きずられて，他にもあるそれ以外の大切な事実を見落としているということがあるのではないかと懸念される。この点をわれわれに気づかせてくれるには，他の研究者の山田村における情報化の実態調査を待つほかにはないであろう。

謝　辞

今回も，本研究の調査に際して応援していただいた多くの方々にお礼を言わなければなりません。お助け隊のメンバーとして快く迎えてくださった学生の皆様，訪問先の山田村

民の方々。一緒に講習会を進めていただいた情報センターはじめ教育委員会，およびパソコンリーダ，こうりゃく隊，文化祭実行委員ほか村の皆様に厚くお礼申し上げます。

注　釈

＊1　情報化と呼ぶべきかもしれないが，ここでは電脳化という言葉で通すことにする。その理由の一つは拙稿[1]の表題にこの言葉を使用したことにあり，本稿はその延長線上に位置するものである。

＊2　「こうりゃく」（合力）とは山田村の方言で，助け合う，手助けする，という意味があり，「明日，隣の家へこうりゃくに行ってくっちゃ」という風に使われることばである。

＊3　パソコンリーダとは，情報化推進の為に山田村全23地区からそれぞれ１～２名選ばれた村民で，地区の中で身近に聞ける相談相手という位置づけである。

＊4　２期生の活動の様子を物語る挿話がある。２期生の自発的な活動は，「山田村ってどんな村」という村民へのアンケートをとり，自分たちの村を自分たちはどのように感じているのかを知ろうという話から本格化した。平成７年の文化祭ではそのアンケートに基づき，「村に風穴をあけよう!!」という合い言葉の下，「山田村って住み良いの？」というテーマでディベート劇を演じた。何日もリハーサルを繰り返していくうちに，塾生の絆が徐々に固くなり，劇は好評を得て幕を閉じた。その後全国規模のシンポジウムの開催など自分たちで企画し実施することを重ねていくうちに，「地域では皆が元気で皆が主人公なんだという意識の芽生えができ，こうりゃく隊へつながる前向きな姿勢が自然にでてきたのではないか」と情報センターの岩杉氏は振り返る。詳細な活動記録が「２期生の活動報告」[4]として作成されている。

＊5　学生ホームページとこうりゃく隊のホームページは，それぞれ以下で参照できる。
http : //www. yamadamura. net
http : //www. vill. yamada. toyama. jp/~msimo/op/otasuke. html

＊6　山田村の家は，広い廊下に面した玄関を入ると広間，仏間，控えの間などが続き，玄関の裏手側に台所，居間，その他の部屋をもつ大きな家が多い。見取り図の部屋の名前は，訪問先の家族が話してくれた呼び名をそのまま使った。

＊7　マッキントッシュを希望した家庭には，統合ソフト「クラリスワークス」が配付されている。

＊8　桂寮は，山田村の小学校の横に建てられている小中学生用の合宿や冬期間の宿泊施設で定員は約70名である。村の好意で，学生達の宿泊用および本部として利用された。

＊9　ふれあい祭りを，学生がレポートに順次まとめてふれあい祭りのホームページにのせる予定になっている。また祭り総決算としてのCD-ROM作成が待たれる所である。

＊10　この講習をきっかけに講師やスタッフとなった一般社会人は「勝手に山田村を応援する会」というボランティアグループへと発展している。

＊11　めだかの学校とは，作家の住井すゑさんが晩年，身体が自由に動かなくなっても，休むことなく開いていた勉強会を，誰もが先生で誰もが生徒になる「めだかの学校」であると呼んでいたことに起因する。[1]山田村の電脳化は「めだかの学校」方式でゆっくり進んでいる。

参考文献

1）小松裕子・小郷直言；「電脳山田村への道」，大阪大学大型計算機センターニュース，Vol.27 No.2，1997

2）小松裕子・小郷直言；「情報技術の導入時における社会的支援の在り方」，高岡短期大学紀要，Vol.10，1997

3）富山県山田村；「山田村総合計画1993-2002年」，平成５年３月

4）富山県山田村；「めざそう山村ユートピア」山田村ふるさと塾第２期生活動報告，平成８年

Combining Tradition with the Information Age to Enrich Cooperative Learning in Rural Toyama Prefecture: The Yamada Village Learning Festival of 1997

Yuko KOMATSU and Naokoto KOGOU*

(Received October 31, 1997)

ABSTRACT

Yamada, a small rural village in Toyama Prefecture has achieved global recognition for its innovative project "Information Technology for Each Family". This paper describes the process during which each household learned how to operate a donated personal computer in cooperation with volunteers from all over Japan; furthermore, it elaborates upon the many ways that the cooperative learning experience was beneficial to both the volunteers and the villagers as well.

Although seminars on the use of personal computers were initially limited to a traditional lecture style format, they gradually evolved into interactive, hands-on training sessions in which everyone participated. By the end of this festival, it was clear that the villagers had developed a practical sense of how they could use information technology to enrich their own lives by skillfully combining all of the information related resources at their disposal. The author feels that the festival was a resounding success that should be used sa a model disposal. The author feels that the festival was resounding success that should be used as a model for similar attempts to encourage the use of information technology in society.

KEY WORD

Yamada village, Support, Information-society,
Information Technology, Internet